

共通テスト、専門家が立て直し案を提言 格差を解消し、生徒の力も伸ばす「英語のスピーキング力」の測定法とは

2020.2.1 08:00 [AERA#大学入試](#)

昨年、導入が見送られた大学入学共通テストの「英語民間試験による4技能評価」と「国語・数学の記述式問題」のあり方について、国による1年間の検討会議が始まった。頓挫した2本柱の穴は、どう立て直していけばいいのか。「テスト理論」「英語スピーキング」「国語教育」のそれぞれ第一人者である、東京大学名誉教授の南風原朝和さん、京都工芸繊維大学教授の羽藤由美さん、日本大学教授の紅野謙介さんが、AERA2020年2月3日号で専門的な見地から提言する。

* * *

——共通テストの「英語のスピーキング」と「記述式」の頓挫した穴はどう立て直していけばいいでしょうか。

南風原：そもそも大学入試は選抜が目的で、入学後に必要な力を測るのが目的です。東京大学ですと、文献などを読むうえで、一定レベル以上のリーディング力はないと厳しい。一方、スピーキング力は多少足りなくても、入学後でどうにかなる。求める英語力は大学によって違うはずなので、個々の大学で判断して課せばいいと思います。

羽藤：英語のスピーキング力は文法知識を詰め込んだり、定型的な発話練習を繰り返したりしても伸びません。「たくさん聞いて、読んで、必要に応じて話す」。そうしているうちに、意識しないで使える知識が定着します。知識を一方向的に注入し、その蓄積を評価する「プロダクト重視」ではなく、環境を整えて生徒の中に思考力や判断力が育つのを促す「プロセス重視」の指導が必要なのです。時間がかかるのを覚悟し、能力の発達を促す環境を整えることが重要です。

——羽藤さんはコンピューター方式のスピーキングテストを開発し、大学のAO入試などで使っています。共通テストに適用させることはできますか。

羽藤：スピーキングテストの開発と運営には膨大な手間と費用がかかります。しかし、それで話す力が画期的に伸びるわけではありません。南風原先生がおっしゃったように、そもそも共通テストにスピーキング試験を入れるかどうかの議論が必要だと思います。そのうえで必要となれば、対案は考えています。

大学入学共通テストをめぐる主な動き

- 2014年12月22日 ● 中央教育審議会が新テスト導入を答申
- 2017年7月13日 ● 文科省が「大学入学共通テスト実施方針」を公表
- 11月 ● 第1回プレテスト実施(英語は18年2月)
- 2018年11月 ● 第2回プレテスト実施
- 2019年6月7日 ● 大学入試センターが、共通テストの問題作成方針を公表
- 11月1日 ● 萩生田光一文科相が英語民間試験の導入見送りを発表
- 12月17日 ● 萩生田文科相が国語・数学の記述式問題の見送りを発表
- 2020年1月15日 ● 第1回「大学入試のあり方に関する検討会議」開催
- 1月18、19日 ● 第31回大学入試センター試験を実施
- 2021年1月 ● 第1回大学入学共通テスト実施予定

AERA 2020年2月3日号より

——具体的には？

羽藤：生徒のスピーキング力が一番わかるのは普段指導をしている高校の先生のはずです。民間試験活用の際に導入された、「CEFR」(セファール=ヨーロッパ言語共通参照枠)は「このレベルなら具体的にこれぐらいのことができる」という大まかな指標です。動画などを使って、先生が各生徒の能力を判断できるようにしたいと思います。大学は必要に応じて、その評価を入学者選抜に利用すればいい。

——導入見送り前に、東大や名大などが英語民間試験を必須とせず「高校が CEFR の A2 レベル以上を証明する文書を提出すればいい」という選択肢を設けていました。その方式ですか。

羽藤：そうです。ところが、そこでおかしなことが起きていたんです。A2 は「自分や学校、地域など身近な事柄について、簡単な文や語句を使って話すことができる」といったレベルですが、先生が判断できないので、生徒に民間試験を受けさせるというようなことがありました。適切なスピーキングの指導が十分に浸透していないのです。この方式の導入によって指導環境や指導法の改善につながるものが、実は一番の狙いです。

南風原：この方法であれば受験上の地域格差や経済格差などの課題は解消されますね。

——高校の教員の評価力をいかにつけていくか、などは考えていかないといけないですね。

羽藤：大学や高校の教員の有志で議論しており、3 月末ごろにたたき台を発表できればと思います。

——国語の記述式の立て直しはいかがでしょうか。

紅野：50万人規模の記述式問題の実施が不可能なことは議論するまでもなく、もはや明らかです。そもそもセンター試験は科目数が30に及ぶなど巨大化が課題で、機能分散が不可欠です。

南風原：入試改革の議論のスタート時には「センター試験のスリム化」という課題が共有されていました。それが、記述式を加え、英語民間試験も加え、逆に肥大化するところでした。

紅野：大学の多様化で、単科大学をはじめ入試科目を自前でそろえるのが難しいケースも出てきています。そうしたことを視野に入れながらも、機能分散する必要があります。記述式問題は基本的に、個々の大学がどういう学生をとっていかを考えながら決めていけばいいと思います。実際、国公立大学の大半は既にやっているのですから。

——受験生の多いマンモス大学では実施が難しそうですね。

紅野：私が勤務する日本大学文理学部がまさにそうです。ですから試験は一部を除いて大半がマークシート式で、工夫しながら作問しています。不十分な部分は認識していますので、初年次教育の小論文指導でカバーしています。無理に入試に押し込まなくても、記述力、表現力を伸ばす手立ては色々あります。大学4年間で力をつけていけばいいのですから。



(左から)【京都工芸繊維大学教授】羽藤由美さん(はとう・ゆみ)／【日本大学文理学部教授
学部長】紅野謙介さん(こうの・けんすけ)／【東京大学名誉教授広尾学園中学校・高等学校
長】南風原朝和さん(はえばら・ともかず)(撮影／写真部・小山幸佑)



今年のセンター試験風景。約50万人が受験し、肥大化するなか受験生の学力差も広がった。一斉試験の狙いをどこにおくかも、共通テストに引き継がれる検討課題だ (c)朝日新聞社

AERA 2020年2月3日号より

●鼎談参加者

南風原朝和(はえばら・ともかず): 東京大学名誉教授。広尾学園中学校・高等学校長。日本テスト学会副理事長。専門は心理統計学、テスト理論。東京大学理事・副学長、高大接続研究開発センター長などを務めた

羽藤由美(はとう・ゆみ): 京都工芸繊維大学教授。専門は応用言語学。コンピューター方式のスピーキングテストを開発し、同大の英語プログラムやAO入試で実施している

紅野謙介(こうの・けんすけ): 日本大学文理学部教授、学部長。専門は日本近代文学。筑摩書房高等学校用国語教科書編集委員。著書に『国語教育 混迷する改革』(ちくま新書)など

(構成／編集部・石田かおる)

※[AERA](#) 2020年2月3日号より抜粋